

ネーネーズの「糸綾」

(2010年4月9日。ライブハウス島唄にて)

海 山 道 人

糸綾

「ネー、ネー、ネー
タ。ネー、ネー、ネー
タ。四人（よたい）揃
てネーネーズ、アリ ネ
ネーズ……」

だから。
2009年8月から十一月までの5カ月間、上原渚さん、比嘉真優子さん、仲本真紀さんの3人で切り盛りしていたネーネーズが、今年の1月1日より新たに保良光美さんを迎えてようやく本来の4人に戻った。彼女たちには4人揃わないと歌えない歌がある。それがこの「糸綾」なのだ。

ネーネーズのステージは、通常バックに録音された伴奏が流れる。しかし、糸綾は彼女たち自身が演奏する2本の三線と三板と太鼓だけで歌われる。それだけで十分な音量と多彩さを確保しているのは、彼女たちの底力の一端を示すものである。自分たちのことを、少し自慢げに紹介するこの歌は、歌っている彼女たちを見ながら聞くと、より楽しい。

ネーネーズはやはり4人でなければ……。

厳しい雰囲気だった昨年十一月のステージと全く異なり、4人ともリラックスし、本当に楽しそうだ。新しく入った保良さんは、飾らない人柄の温かい心の持ち主であることが、その歌いぶり、しぐさ、トークなどからよく分かる。良い人が入ったと思つ。

今回の席は、向かつて左から2番目で歌っている上原さんの真ん前である。マイクを通さない彼女の生の声が聞こえてくる。思えば、一年に初めてライブハウス島唄でネーネーズを聴いたときのメンバーのうち、残っているのは上原さん



一人になってしまった。すげすげと物怖じせずによくしゃべる人ではあったが、その一方で人懐っこく、何かしら人をひきつけるものを持っている。

僕は眼前の上原さんの歌に耳を傾けた。



彼女の歌はいつも的確な表現を持ち、他の3人とのバランスをよく考えて歌われているように思える。話す声はハスキーだが、歌うとそれは目立たない。一年に比べて

ぐっと安定感が増した。歌に合わせた動作は指の先まで神経が行き届いている感じで、「止め」のタイミングと形がすばらしい。

第1ステージの最初の曲は、何年も前から「明けもどり」であつたと思うが、今回は、装いも新たに「コンタ」で開始され、「明けもどり」はこの歌に続いて登場した。神々への素朴な祈りを歌うこの歌は、ネーネーズのステージのシンボルのようなものである。

来るたびに印象が違つ。今の若いメンバーも、莊厳な雰囲気を持つこの曲を、歴代メンバーと同じように心をこめて歌つている。しかし、この曲のむずかしいところは、単に歌がうまといつだけでは本当の姿を伝えることはできないといふ点にある。

時々、左肩が右肩よりも上がって見える。不思議に思つていたが、三線を持つたときの彼女を見て納得した。ぴたりと決まつてゐるのである。おそらく小さじときから三線は体の一部のようになつてしまふのである。左肩が上るのはそのためであつた。

一昨年の上原さんは別人のように成長した彼女が目の前にいる。体は小さいが大きな度量の持ち主であると感じる。このチームの今後の発展は、彼女がその度量をどれだけ發揮できるかということと大いに関係しているだつ。

うみかじ

彼女たちはつむなー生まれ、うちなー育ちとはいえ、まだ島の神様たちと一緒に暮らしたことがないのではなかろうか。上原さんも比嘉さんも仲本さんも保良さんも、これから人生の中で多くの神々に出会いであつた。この中の誰かが一人の神様に出会い、「」とに、彼女達の「明けもどり」は更に深い内容を獲得していくであつた。

さて、第1ステージの5曲目は「つむかじ」である。知名定男作詞・作曲になるこの歌は、去つて行つてしまつた恋人を想ひ、切なく、哀しい歌である。

この主人公は男だらうか、女だらうか。歌つてゐるのがネーネーズなので女性の心を歌つてゐると思つてしまつが、男に置き換えても何うおかしくはない。

長い人生の中で、こんな感情を一度でも持てた人は幸せである。その人の人生が豊かな情緒に満ちたすばらしいものである」との証であるからである。この歌は、最後の一節がソロで歌われることがある。予想通り、ここは比嘉真優子さんが歌つた。僕にとって今回で3回目となるこの人は、来るたびに姿が変わる。

最初は、大きな口を開けて天真爛漫に歌つアラレちゃんのようだった。2回目には、まるで粋な新橋芸者のような色っぽい姿になっていた。ところが今回は、歌つことじっくりくらうと表情が変わる百面相のお姉さんに変身していたのである。

あるときはやさしく表情のお地蔵様のよひ、あるときは

ふつくらした頬つぺたのお多福のよひに、あるときは口を尖らせたヒョウシトコのよひに、あるときは角ばつた鬼瓦のよひに、歌と関連して顔の表情がどんどん変わっていく。

抜群の声量と歌のうまさは天性のものであらうが、最適の響きを引き出すために、彼女は顔面のあらゆる筋肉を使つていて。その結果が百面相なのだ。

このネーネーズのメンバーは、全員、なお未だ発展途上にある。比嘉さんも同じで、前回にきたときに比べてまた一段進歩したと感じる。百面相はその途中の姿であるに違いない。

がんばれ百面相。でも少し太つたな



安里屋コンタ

この曲に元歌があるとは上原さんの説明を聞くまで知らなかつた。「安里屋節」と呼ばれてゐるらしい。その元歌を比嘉真優子さんが歌つ。これまで聞いたこともなく、すぐには耳になじまない感じのその歌は、もちろん歌詞の意味は分からぬいが、彼女の名唱も相まって、聽き終えて心に残つた。このネーネーズはいつもこつともできるのだ。

比嘉さんの歌つたのが本当に「安里屋コンタ」で、いわゆ

る「安里屋節」である。今我々が知っているのは、星壳（1905～1977）作詞・富良長包（1893～1939）作曲の「新安里屋コンタ」で、詞の一部が標準語になつている。「これは原曲の直訳ではなく、星が新たに作ったものである。我々が馴染んでいる」の歌は、「新」の語をつけずに単に「安里屋コンタ」と呼ばれるため紛らわしいが、ほとんどの歌手が歌つてるのはこちらのほうである。

1番から2番・3番……と続く歌詞の後ろに、いつも「マタハーリヌ チンダラ カヌシヤマヨ」という八重山方言がくつついている。これは「また逢いましょう 美しき人よ」という意味であるといつ。

この歌は、初代ネーネーズの時代から歌い継がれてきた名曲で、詞は、上原直彦がネ

ーネズのために特別に書き下ろしたものであるらしい。今メンバーよによる演奏も美しく鄉愁に満ち、聴いてしまじみとした気持ちになる。

ふたたび「黄金の花」

第2ステージも最後を迎えてはじめる。まなじりを決し、必死の面持ちで歌つていた昨年とは様相を異にし、おだ

やかでやさしく「黄金の花」が流れてくる。同じ歌とは思え

ない。心安らぐひとときだ。

最後のソロを仲本真紀さんが歌つことは知っていた。楽し



いと想つ。

曲が終わつたあと、客席にいた2歳くらいの女の子が、喜んで「キヤーー」と叫んだ。みんな何が起つたかわからず、一瞬キョトンとした表情を見せたが、それが最前列にいた女の子の声だと分かると、メンバー全員の顔がほころんだ。そのとき一番近くにいた仲本さんが手をふり、白い歯を見せて笑顔で応えたのが印象的だった。笑顔のやさしい人だ。

チム・ネーネーズ

このチム・ネーネーズのメンバーは、若い人で二十歳、最長でも二十一歳ととても若い（でも保良さん）は今回のステージで、もうすぐ四十一歳になると言っていた。…ウソ♪町に出れば、普通のお姉さんたちなのであるが、ステージに立ったときはプロとしての衿持をもち、すばらしい歌を聞かせる。そのギャップがすごい。ところで、彼女たちのアンサンブルは、通常の意味で決して良いとはいえない。声質は一人ひとりもちろん異なっているが、それ以外に、歌い方も節や装飾音のつけ方も一人ひとり異なっている。

これがオーケストラだと、それぞれの楽器は全く同じ音で鳴ることが必要条件である。もちろんフルトヴェンゲラーの振ったベートーベンの交響曲の録音の中には、指揮者の棒について行けずに不揃いのものもあり、これなどは芸術的に特別な効果を生んでいるとはいって、例外中の例外である。本来アンサンブルは精密であるのを佳とする。

る。

しかし、チム・ネーネーズのアンサンブルは決して精密ではない。ばかりかと云ふこともない。彼女たちはそれぞれ自分に合つ歌い方を持っていて、それをそのまま4人で歌うのである。そこには一般的なアンサンブルの概念は存在していない。

でも、「糸綾」で歌つて、四人と共通した環境に生まれ育つた。そのバックグラウンドがあるために、みんなが勝手なつたい方をして、もちろん統一が取れている。

これは、バスケットボールなどのスポーツのチム・フレーに例えられよ。彼らは、身長も違えば得意とするプレーも違つ。ゲーム展開の中では、それぞれがその場面場面で最適の動きをするように心がける。いちいち言葉で言わなくても、以心伝心でそれぞれのメンバーがコールを団指して的確に動く。シユートするのは誰でも良いのだが、各メンバーの動きは同じであつてはならない。それが個性あふれるプレーをしつつ「コールを団指す。チム・ネーネーズのアンサンブルはこれに似ている」と思ひ。



している。「成長して」「」と聞こ換える」ともできる。

僕はほとんどの場合、夏に沖縄を訪れる。今年も9月に予定が入っている。しかし、その頃には4人に戻ったネーネーズがすっかり完成してしまっているだらう。僕は、新しいチームを作り上げていく途中の彼女たちの姿をどうしても見つけた。今回沖縄に来た第一の理由である。

無理をして来た甲斐があった。『糸綾』を聴くことができたのは収穫だった。今度は絶対「片便り」を歌つてもらおうと僕は固く心に決めている。今回十分に聴き取ることのできなかつた保良さんの歌も耳をダンボにして聴いて。この歌もまた、4人揃ってはじめて歌える歌なのだから……。

ネーネーズ 注

1990年に沖縄で結成された4人組の女性ヴォーカル・ユニット。初代ネーネーズが1990年に解散したあと、後続のネーネーズが伝統を受け継ぎ、その後も次々にメンバーが交代して現在に至っている。現在のメンバーは上原渚さん、比嘉真優子さん、仲本真紀さん、保良光美さんで、いずれも20歳から22歳までの非常に若い人たちである。歴代メンバー達の多くは、ネーネーズを卒業しても活動を行っており、その演奏も興味深い。

知名定男作詞 知名定男作曲 ネーネーズの自己紹介の歌である。歌詞は沖縄の言葉なのでよく分からぬが、それでも、得意げに自分たちのことをちょっぴり自慢しながら歌うこの歌は、聴いていてほほえましい。CDではアルバム『メモリアル・ネーネーズ オキナワ』の中に収録されているのが唯一のものだと思うが、現在の若いメンバーの歌もすばらしい。

ゴンタ

知名定男作詞 作曲 「ゴンタ」とは「結歌」と書き、もともと労働歌であると聞いたが、人ととの心を結ぶ歌という意味をも持っているらしい。ネーネーズには「ゴンタ」と名のつく歌がいくつがある。ここで歌われたものは、アルバム『ゴンタ』の冒頭に収録されている莊厳で神秘的な雰囲気を持つもので、ネーネーズの4人が沖縄の神様となつて姿を現し、俗世間の人々に語りかける、という設定であるらしい。

ウムカジ

知名定男作詞 作曲 「ウムカジ」は「面影」の沖縄方言である。非常に叙情的な歌詞で、やはり叙情的で美しいメロディーに託して切ない恋心が見事に表現されている。CDに残された歴代ネーネーズの歌唱はもちろんすばらしいが、現在のメンバーの歌も聴き心えがある。彼女達もまた、いつの日かこのよつな恋を経験するのである。

糸綾